

2021年12月26日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 61 : 1

ルカによる福音書 20 : 1～8

「イエスさまの権威」

<イエスさまは何者か>

ルカによる福音書を読み進めてきて、今わたしたちは、エルサレムでイエスさまが十字架に架けられるまでの一週間、いわゆる「受難週」のところに差し掛かっています。

ここからはしばらく、イエスさまと人々との問答が続いていきます。

今日のところは「権威についての問答」という小見出しがついていました。

祭司長や律法学者たち、長老たちが、イエスさまにあれやこれやと問いかけてくるのです。それに対して、イエスさまもまた質問で返されたりして、何だかここは、とてもややこしい議論がなされているように思えます。

しかし、ここで問われていることはずばり、「イエスという方は、いったい何者か」ということです。それはまた、わたしたちにとっても、大きな問いなのではないでしょうか。

家畜小屋の飼い葉桶で、処女（おとめ）マリアからお生まれになり、エルサレムで十字架に架けられて死んだ方。そして、復活させられた方。この方は、いったい何者か。

これはきっと、イエスさまという方を知ったなら、出会ったなら、誰もが抱く問いなのです。イエスさまという方を知れば知るほど、「この方がどなたか」「いったい何者か」という疑問が、わたしたちの内に湧いてくるのです。

<イエスさまへの問いかけ>

さて、今日イエスさまに問いかけたのは、1節にあったように、「祭司長や律法学者たち」そして「長老たち」と呼ばれる人々でした。

しかし、彼らの問いかけは、単なる疑問だけではなく、激しい敵意を伴っていました。

彼らは一緒になって、イエスさまのところに近付いて来て、こう言いました。「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」

「何の権威でこのようなことをしているのか」。

「このようなこと」と彼らは言いました。そのひとつは、1節に「ある日、イエスが神殿の境内で民衆に教え、福音を告げ知らせておられ」た、とあったことです。福音とは、良い知らせ、という意味であり、イエスさまが告げておられた、神の国、神のご支配のことです。

イエスさまは、神さまの御言葉を語り、神さまの救いのご計画を告げ、ご自分がそのご計画を実現し、人々を恵みの支配の許へと招く者である、ということをお話されました。

イエスさまは、わたしが、神に遣わされた救い主であり、わたしが、神の御言葉を実現する者である。だから、わたしの救いへの招きに応えなさい。わたしを喜んで心に迎え入れなさい。そして、罪を赦され、新しい命を与えられ、神の子として歩みなさい。そのように人々に教え、福音を告げ知らせておられたのです。

19章の最後には、「民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていた」とありました。

そして、「何の権威でこのようなことをしているのか」の、もう一つの「このようなこと」とは、19:45以下にあった、イエスさまがエルサレムの神殿の境内に入って、商売をしていた人々を追い出した出来事のことです。

神殿とは、神さまの御前に恐れをもって立ち、心からの悔い改めをもって、神さまの救いと恵みを求めて、礼拝するところです。しかしイエスさまは、この神殿では、来た時だけの形式的な礼拝しかささげられていない。いつも心を神さまに向けて、歩んでいる者がいない。礼拝に、神さまへの愛が、心が込められていない。そのことを激しく怒られたのです。

しかしなぜ、祭司長、律法学者、長老たちが、このイエスさまの教えや行ないのことを、「このようなこと」と言って、「何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか」と問いただすのでしょうか。

それは、彼らがエルサレムで、自分たちこそ、人々に神さまの御言葉を教える権威を持つ者であり、神殿のあらゆることを取り仕切る権威を持つ者である、と自負していたからです。

事実、彼らは聖書の専門家であり、選ばれた者であり、務めに任命された者たちです。

そのゆえに、彼らは「権威」をもって神の言葉を語り、人々を従わせ、指導し、神殿の務めを行なうことが出来るのです。そして「権威」を持つゆえに、人々に尊敬され、重んじられ、高い身分とされていた人々です。

だから、もし神さまのことを教えたり、神殿で何かをしようとするならば、彼らは、自分たちこそ、それを許可したり、その権利を与えたりする者だ、と主張しているのです。

しかし、我々はイエスという人物に、何の権威も与えていない。何も許可していない。教えも、行ないも、自分勝手にやっていることだ。何の許可で、何の権利でそんなことをするのか。お前はいったい何様だ。質問の裏には、そういう思いがあるのです。

ですから彼らは、「何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか」と問うたなら、自分たちの許可を受けていないイエスさまは、それに答えられないはずだ、と思っていました。

そうして、イエスさまの話喜んで聞いている民衆の前で、イエスさまが何の権威もないこと。誰からの許可もなく、自分勝手なことをやっているだけだ、ということを暴露して、貶めてやろう、と思ったのでしょうか。

前回の 19:47~48 には、彼らがイエスさまを殺そうとまでしていたことが語られています。「毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。」

彼らは、イエスさまが自分たちを差し置いて、勝手なことをしている上に、民衆の人気も集めていたので、プライドが傷つけられ、酷いねたみを抱いていたのです。

<イエスさまからの問い>

さて、イエスさまは、彼らの質問に、こうお答えになりました。

3 節「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」

質問に質問で返す。これは、ちょっと嫌なタイプですね。でもイエスさまがこう返されたのは、彼らが、イエスさまにわざと答えられないと思うような質問をして、貶めようとしていることを、はっきりと見抜いておられたからです。

そしてイエスさまは、彼らへの質問によって、「権威はあなたたちが許可できるような『人からのもの』だけではない。権威には『天からのもの』があり、わたしは『天からの権威』、つまり神の権威を与えられて、それによって教えたり、御業を行なっているのだ」ということを、示そうとしておられるのです。

さて、ここで突然、「ヨハネの洗礼」が出て来ました。ヨハネとは、イエスさまが救い主であることを指し示した、あの洗礼者ヨハネのことです。

ヨハネは、イエスさまこそ来たるべき方、旧約聖書に預言された、神に遣わされたメシアである、と指し示した人物です。彼は、救い主イエスさまの道備えをする者として遣わされた人物であり、そのために、多くの人々に悔い改めの洗礼を授けました。

イエスさまがエルサレムに入られたころには、もう処刑されていましたが、多くの人々が、この洗礼者ヨハネをまことの預言者と信じ、悔い改めの洗礼を受けて従っていたのです。

洗礼者ヨハネは、救い主を証しするために、神さまが選び、立てられた預言者です。

ですからヨハネは、祭司長や律法学者たちに、何か権威を与えられたり、許可を受けたりしたことはありません。つまり、ヨハネが語った預言、指し示した事柄、イエスさまを救い主と証ししたこと。それらはすべて「天からのもの」。つまり、神からのもの、なのです。それは当然、人が認めたり、認めなかったりする余地のない、人が介入することが出来ない「神の権威」です。

ヨハネの活動が、そうした「天からのもの」であることは、ルカによる福音書が、1 章でイエスさまの誕生に先立って、ヨハネの誕生から書き記し、ヨハネがイエスさまを指し示す預言者として、神さまに選ばれ、立てられたことを証言していることから分かります。

だからこそ多くの人々が、ヨハネを神のまことの預言者と信じ、その力強い御言葉を「天からのもの」として受け入れたのです。

しかし、祭司長、律法学者たちは、ヨハネが教えることを、決して信じず、受け入れようとしませんでした。ルカの 7:29~30 にはこう書かれているところがあります。お聞きください。「民衆は皆ヨハネの教えを聞き、徴税人さえもその洗礼を受け、神の正しさを認めた。しかし、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちは、彼から洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ。」

「神の御心」とは、神さまが救い主イエスさまを遣わし、この方の罪の贖いを通して、人々をご自分の許に立ち帰らせ、救いを得させようとしておられることです。

しかし、ファリサイ派や律法の専門家たちは、ヨハネから洗礼を受けないで、自分に対する神さまの救いのご計画を受け入れなかった。神さまの御心を拒んだ。自分たちこそ正しいと思い込み、神さまの正しさを、ヨハネが語ることを、認めなかったのです。

そんな彼らに、イエスさまは問われたのです。20:3~4「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」

問われた彼らは、相談をした、とあります。5~6 節「彼らは相談した。『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。『人からのものだ』と言えば、民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。」

彼らの本心は、ヨハネの洗礼が「天からのもの」だとは、絶対に言いたくない、ということです。ヨハネのことを信じていないからです。

では、天からでなければ、ヨハネは何からの権威で語ったことになるのでしょうか。それが、答えにくいところです。

もしヨハネのことを、「天からのもの」と言いたくなくて、「人からのもの」だと言ってしまえば、「民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。」と言っています。

つまり、ヨハネのことを、神に遣わされた預言者であると信じ込んでいる民衆が、ヨハネは神からのものではない、単に人から出たものだと言われたら。きっと民衆は、自分たちの信仰を否定された、と激しく怒り、自分たちに牙をむくかも知れない、と恐れたのです。

注目すべきは、祭司長や律法学者、長老たちが、ここで最も恐れているのは、神さまではない、ということです。恐れているのは、民衆です。そして、守ろうとしているのは、神さまの御言葉ではありません。自分たちの安全です。

もし彼らが、自分たちこそ「神の御言葉」を正しく教える権威を持つ者であり、それを守る者であると自負しているならば、彼らは「神の御言葉」を調べ、それに基づいて、ヨハネ

をはっきりと否定し、人々を正す責任があったはずですが、しかし、彼らは自分の保身しか考えていません。ここに、神さまに誰よりも仕えるべきだった彼らが、神さまの御心から遠く離れてしまっていることが、更にはっきりと顕わにされているのです。

また、彼らが人々の反感を恐れて、もしヨハネの権威を「天からのものだ」と言ってしまったら、それは彼らが、ヨハネが本当の神からの預言者であると信じている、ということになります。それは彼らにとってはあり得ません。

しかも彼らが、自分たちが権威を与えていないヨハネの活動を、「天からのもの」である、神の権威で行なっているものである、と認めるなら。それは、彼らが権威を与えていないイエスさまの活動もまた、「天からのもの」である、神の権威によって行なっているものである、という道理が、通ってしまうことになるのです。

…ですから、彼らは質問に、ただ「どこからか、分からない」と言うしかなかったのです。

もしここで、民衆に人気があるイエスさまが、「わたしの権威は、天からのものか、人からのものか、あなたたちは何と言うか」と直接的に彼らに聞き返されたなら。彼らはまったく同じように、民衆を恐れて、何も答えられなかったでしょう。

彼らが悪意をもって、「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのは誰か」とイエスさまに質問したこと。

これは、結局彼ら自身に跳ね返ってきて、彼ら自身の神さまに対する態度、イエスさまに対する思いを問われることになりました。

そして彼らは、自分たちが、神さまよりも民衆を恐れていること。神さまの御言葉よりも、自分の身の安全が大切であることを曝け出したのです。

そしてこれらのイエスさまの問いは、突き詰めれば、「あなたたちは、わたしが、天からのもの、神の権威を持つ者であることを、信じるか、信じないか」という問いだったのです。

<信じるか、信じないか>

イエスさまはこれらの質問を通して、ご自分の権威が、まさに「天からのもの」である、ということを示しておられます。そして実はこれまでも、イエスさまはずっと、ご自分が何者であるかを、何度も人々に教えてこられたのです。

今日の1節には、「イエスが神殿の境内で民衆に教え、福音を告げ知らせておられる」とありました。

イエスさまが語っておられるのは、福音です。神の御言葉です。神さまの良い知らせ。救いの知らせです。神の国、神のご支配が実現し、人々を罪と死から解放し、恵みと新しい命の中に招かれている、という、素晴らしい知らせです。

そしてイエスさまは、「その救いを実現するのが、わたしなのだ」と、繰り返し人々に教え、語り、御業によって示して来られました。

今日読まれた、旧約聖書のイザヤ書は、神さまが救い主を遣わされることを預言された箇所です。そして、ルカによる福音書 4:16 以下には、イエスさまが伝道を始められたころ、安息日に会堂でこのイザヤ書の箇所を朗読し、人々の前でこう語られた、ということが記されていました。どうぞ、お聞きください。

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった。『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。』イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた。」

イエスさまは言われたのです。この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。このわたしにおいて実現した。そうです。イエスさまこそ、神さまの御言葉を実現なさるお方なのです。イエスさまこそ、神の御言葉そのものであり、福音そのものなのです。

イエスさまは、ご自分の御言葉、教え、御業、奇跡、そして十字架に至るそのご生涯のすべてを通して、ご自分が神さまの救いの御言葉を実現する「救い主」であること。神の御子であること。神の権威を持つ者であることを、人々にはっきりと証してこられました。それは、復活の出来事によって、多くの人々に、更にはっきりと明らかにされました。

旧約聖書の預言者の時代から、イスラエルの民に語られた神さまの御言葉は、イエスさまを救い主であると指し示し。わたしたちが問う前から、イエスさまは、御自分が何者であるかを、はっきりと証しし、示して下さっているのです。

そうであるなら問題は、わたしたちがイエスさまに、「あなたはいったい何者か」と問うことではありません。イエスさまが何者であるかは、既に明らかにされているのです。

むしろ、わたしたちが、イエスさまから問われているのです。「あなたがたは、わたしを何者だというのか。」「あなたがたは、わたしを救い主であると信じるか。」

…わたしたちは、このイエスさまからの問いを、真剣に受けとめなければなりません。

そして、自分が何と答えるべきか。それを求めて、福音に、神の御言葉に、真剣に耳を傾けなければなりません。その中でわたしたちは、神さまの御心を知らされ、この方が本当に神の権威を持つ、「わたしの救い主」であるということ、思い知らされていくのです。

世界をお造りになり、すべての命を支配なさる「神の権威」を前に、わたしたちはひれ伏し、へりくだり、従うべきものです。しかし神さまの権威は、人間が持つ権威のように、高ぶったり、威圧したり、人々を委縮させて従わせるようなものでは、決してありません。

わたしたちは、御言葉に耳を傾ける時、家畜小屋の飼い葉桶でお生まれになり、苦しみの十字架の死へと至られたその御生涯こそ、「救い主」としての歩みであったことを知らされます。誰よりも低くなり、人々に仕え、命を惜しまず与えられたイエスさまの歩みこそ、「天からの権威」、「神の権威」によるものであったことを告げられます。

イエスさまは神の権威を、すべての人を愛し、すべての人を罪から救うために用いられました。そのために、イエスさまは、神の身分を捨てて、貧しく弱い人間と同じになられること。ご自分の命を犠牲にして、すべての人の罪を贖うこと。死からよみがえって、滅びるべき者に復活の約束を与えること。これらを、神の権威によって、成し遂げて下さったのです。

…人の権威の象徴は、豪華絢爛さや、立派さや、身分の高さに現わされるように思います。しかし、イエスさまの神の権威は、まさに、あの苦難に満ちた、あの悲惨な十字架にこそ、もっとも現わされたのではないのでしょうか。

ですから、わたしたちが「神の権威」に従うというのは、何か強い力に押さえつけられるようなことではありません。そう思っているなら、きっと反発したくなってしまうのです。

しかし御言葉は、イエスさまがどのような方であるかを教えています。わたしたちは、自分よりももっと低いところへと降り、王でありながら僕に仕え、敵対する者のために惜しまず命を与えられる、そのようなお方の権威に従うのです。

ですから、神の権威を持つイエスさまに従うとは、わたしたちが神さまのご計画に従って、神さまの愛と恵みを受け取り、救い主イエスさまに自分のすべてを委ねて、その御手に包まれて安心して歩む、ということなのです。

イエスさまは問われます。「あなたがたは、わたしを何者だと言うのか。」

わたしたちは、このまことの人となられた神の御子を、「わたしたちの救い主です」。そう心から信じ、告白する者になりたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちが、神さまの御心を拒むことがありませんように。自分の栄光を求めて、高ぶることがありませんように。神の権威によって、福音を告げて下さり、わたしたちのために救いの御業を成し遂げられた、十字架と復活のイエスさまにこそ、栄光がありますように。

そして、わたしたちが、イエスさまこそ「わたしたちの救い主」と信じ、神さまの御心に従って、恵みの中を歩いていくことが出来ますように。

救い主、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン